百々裏話（38）

おもて　あきら

【音曲口伝（音曲声出口伝）について】

世阿弥の伝書の中に、音曲声出口伝（オンギョクコワダシクデン）と通称されている音曲論書がある。ある人から、「上も下も音読するからには、中の二字も音読してセイシュツと読むべきではないか」と問われたことがあり、また〝音曲に声出だす口伝〟などと読むことも可能な題目であるが、同じ世阿弥の音曲論書『風曲集』等に、

文字の正を心えて、こわだし、文字がしら、又は韻字のならびに、同正をゝくべからず。

など、「声出」としか漢字のあてようのない所に仮名書の用例が幾つかあるから、「声出」がコワダシと訓読すべき語であることは確実である。写本の中には、「音曲声出スロ伝」としたものもあるが、コワダシの訓を知らぬ筆者が「声出ス」と勝手に「ス」を付けてしまつたものに相違あるまい。

この音曲声出口伝は、世阿弥の数ある伝書の中でも『風姿花伝』（第三まで）と並んで或はそれ以上に、広く流布した本であつて、残存する伝本も多く、殊に幾つかの能の伝書を集めて編集した形の室町末期成立の伝書類に入つていることが多い。八帖本花伝書の巻三（謡）と巻八（稽古）に混入しているのなどもその一例である。

然るに、世阿弥伝書がまとまつた形で公刊された最初の本である吉田東伍博士校訂『世阿弥十六部集』（底本は堀家旧蔵本。明治42年2月刊）には、偶然、音曲声出口伝が含まれていなかつた。このことが、同書について研究者が後年まで誤つた取扱いをするようになつた原因となつているのである。その点を少し顧みてみよう。

八帖本花伝書の中に音曲声出口伝が混入していることは前述したが、吉田東伍博士は、『世阿弥十六部集』所収の本物の世阿弥伝書を調査した限で偽物の世阿弥伝書たる八帖本を子細に閲読した結果、〝偽中の真〟というべき、十六部には含まれぬ世阿弥の真説が八帖花伝書に混じていることを見破り、『世阿弥十六部集』の末に「附録　花伝書逸文」として、それに該当すると信ずるところを摘載せられた。博士が抜き出されたのは、八帖本の巻三から三条、巻八から二条であるが、これは、八帖本に混入している音曲声出口伝のほとんで全部を網羅したに近く、わずかに、巻三の中の「曲になまる事」の一条を脱し、「曲舞とたゞ音曲の分目」の項の毛詩の引用文のあとの若干行を落したに過ぎない。誠に驚嘆すべき洞察力と評さねばなるまい。

しかし、こうして抜き出した八帖本中の世阿弥の真説を、「花伝書逸文」と題し、〝恐らくは花伝第六に擬せらるべき〟ものと考えた点は、吉田博士の誤解であつた。博士がそのように推測したのは、『世阿弥十六部集』には第五までの『風姿花伝』と『花伝第七別紙口伝』のみがあつて、「花伝第六」が欠けていたためであり、当時としてはやむをえない誤解であつたと言つてもよいであろう。

さて、音曲声出口伝の正しい姿が初めて学界に紹介されたのは、雑誌『芸文』の大正二年八月号に掲載された藤代禎輔博士の論文「世阿弥音曲声出口伝」によつてである。藤代博士は、当時京都片山家に保管されていた観世宗家蔵の『風姿花伝』（いわゆる宗節本）に合写されている音曲声出口伝を底本として翻印されたのであるが、その観世宗家本が、たまたま、第五まで風姿花伝のすぐあとに音曲声出口伝を合写した本であつたため、『世阿弥十六部集』附録に於ける吉田博士の推測

が裏書きされた形となり、藤代博士は別にそうは言つておられないが、音曲声出口伝を「花伝第六」とする考えが、大むね学界の定説のようになつてしまつたらしい。大正十五年刊の『校注世阿弥十六部集』（野々村戒三）や、昭和二年刊の岩波文庫『花伝書』が、「花伝第六」として音曲声出口伝を収めているのはその現われと見られ、それについて異論のあつたことを聞かない。

昭和六年に、観世宗家蔵の世阿弥自筆『花伝第六花修』が発見されて、音曲声出口伝を「花伝第六」とする見解が誤りであることが明らかになり、いわゆる世阿弥十六部集とは別種の世阿弥伝書であるとの正しい認定が、ようやく生まれるようになつたわけである。

だが、『花修』の発見によつて、音曲声出口伝を「花伝第六」とした誤りは訂正されたものの、この伝書の書名を、「音曲声出口伝」とした誤りは、依然として踏襲されている。藤代博士が依拠された宗節本『風姿花伝』では「音曲声出口伝」の六字がそれ以下の論の表題と見える形で書かれており、他の写本もほとんど同様なのであるが、内容から見て「音曲声出口伝」が書名であるとはとうてい考えられない。

問題の音曲伝書は、能勢朝次博士の『世阿弥十六部集評訳』の分類に従えば、1一調二機三声・2音曲の習ひやう・3曲に訛る事。4声をつかふ事・5祝言望憶の声の分目・6曲舞とたゞ音曲との分目・（附祝言望憶の例曲）の七節から成つているが、〃声出〃に関する口伝と覚しきものは最初の一調二機三声の節のみであり、他は〃声出〃とは無関係なことである。従つて、宗節本等に

音曲声出口伝

一調二機三声

の形で冒頭に大書されている「音曲声出口伝」は、書名ではなくて、「一調二機三声」の別題、ないしは副題的なものと考えるべきであろう。同じ内容で、文句もほとんど一致する一調二機三声の論が、『花鏡』の第一題目にも位置しているが、その見出しには、

一調二機三声　音曲開口初声

とある。明らかに副題と見なされる『花鏡』の「音曲開口初声」と対応しているのが「音曲声出口伝」であり、一調二機三声の論のみにかかわる題目であることに、間違いはあるまい。音曲声出口伝の写本によつては（やや形の崩れた内容ではあるが）「音曲第一口伝」などと一調二機三声に肩書している例があることも参照すべきであろう。

従つて、音曲声出口伝の名で呼ばれている世阿弥の音曲伝書は、元来は無題の本であつたと思われ、もつと適当な通称を案出した方がよかろうと考えている。小西甚一博士は、『能楽論研究』に於いて「音曲之書」なる仮称を用いておられるが、これは、私説と同じ立場に立たれ、観世宗家蔵の、室町末期と思われる写本の表紙の墨書に従われたものである。しかし、それが元来の書名に非ざることは他本に例が見られないことからも明らかであり、「音曲之書」ではあまりにも一般的であり過ぎるようである。従来の通称とのかねあいも考慮して、『音曲口伝』と呼んだらどうかと考えているのであるが、どんなものであろうか。

なお、『音曲口伝』には写本がすこぶる多いが、最初に藤代博士が翻印された観世宗家蔵のいわゆる宗節本が最も善本と認められ、ついで小西博士が書名に採用された観世宗家蔵の『音曲之書』が、附載の祝言・望憶の例曲（これは有るのが正しい形であると思う）を欠いてはいるが善本であつて、この両書を校合することによつて、ほぼ原形に復元できるようである。

（41・5・2）